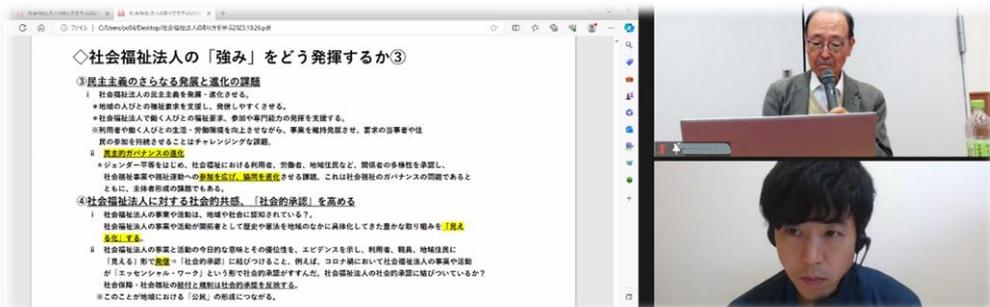






午後は、浜岡先生がリードする特別ゼミナール。多忙な日常で社会福祉法人の在り方を落ち着いて考える時間は、年々持ちにくくなっているのではないのでしょうか。養成学校はそういった意味でも貴重な時間となります。



1951年の社会福祉事業法施行から、1990年代後半の基礎構造改革で狙われたもの、それは社会福祉法人を福祉サービスの供給主体へと押し込むことでした。それが社会福祉法人制度改革においては、市場化された福祉サービスに乗れない層の受け皿の役割が期待されるという変転ぶり。社会福祉法人に対して公益性を求めるといふ動きの一方で、ガバナンスは限りなく営利企業に近い形をも要求してきています。これらの流れを歴史的経緯の中で押えていくことは中々大変です。前記のとおり、予め、自主ゼミを通じて深めるべき論点は絞り込まれていましたが、それでもなお、網羅的理解に向けての道は険しく、今後の「弛まぬ学び」の必要性を受講生一同が強く認識したことと思います。

養成学校の受講スタイルは、これまで述べてきたように、まず、個別で基本レジュメ、関連資料に挑み、自主ゼミで深めるべき点や疑問を整理し本講義に挑むというものです。そのうえで非常に重要なことが、本講義後のふりかえりとなります。多くのゼミが1、2週間以内に自主ゼミを開催していますが、ここで、「弛まぬ学び」の一コマをご紹介します。

あるゼミでは、それぞれの受講生が自身の事業分野に引き寄せて、外部情勢の変化に関して再度の意味づけをおこなっています。そこでは、署名活動・要望書提出、ひいては運動の捉え方といった平素の取り組みについて、地域住民や他の社会福祉法人の共感をより集められる方策まで論議が広がりました。他者のふりかえりに呼応して、気づきが気づきを生み出す、そこでは、まさに集団で学ぶダイナミズムが発揮されています。「事前学習→本講義→(本講義の反芻)→ふりかえり→実践における新たな取り組み」管理職養成学校らしい、学びのPDCAサイクルを特筆しておきたいと思います。そして、このような講座の基本設計について、大所高所から助言くださった浜岡先生には改めて感謝申し上げます。

さて、1日の学びを通じて、「新しい戦前」ともいべき危機的な社会情勢の中で、社会福祉法人が、民主主義のさらなる発展と進化という、大きな課題に対応する手掛かりを得られたように思います。私たち、ひとりひとりが社会福祉法人の事業と活動の今日的な意味をわかりやすく地域に発信する主体であることを大いに実感しつつ、受講生の皆さんが、それぞれの法人の「理念のバトン」を受け継いでいくことを願い、第2講座の報告とさせていただきます。

次回、第3講座は京都丹後地方に舞台を移した1泊研修となります。長丁場の養成学校もいよいよ山場。関係者のみなさま、引き続きの支援をお願いします。



関係者のみなさま、引き続きの支援をお願いします。

~修了式(第5講座)に向けての各ゼミでの進捗状況も報告されました!~

第3講座は、11月21日(火)22日(水) 京都府丹後地方 与謝野町を舞台としたフィールドワーク。よさのうみ福祉会とシオノ鋳工を訪ね、組織運営や実践を学びます。

